

2007 residential design competition 住宅設計コンペ theme「未来」

The highest award

最優秀賞 山川 弘光 神奈川大学



「CAR × ROOF」



Concept

郊外の住宅地において車という乗り物は、必要不可欠な物になっていると思います。近代化が行つたことは不自由のマイナスよりも自由のプラスを評価するということでした。そのことにより生活はずいぶんと楽になりました。しかし、いったん近代化をおえた人々がいつまでもその価値観に縛られている必要はないと思います。それと同じように住宅も形を変え続けてきました。

昔、日本の住宅にはひとつの大きな屋根があり、ひとつの大きな空間があり、さまざまな機能がその屋根を介してあいまいにつながり、そこには現代のような明確な機能によって分けられたパーソナルな空間ではなく、その場その場で機能が入り混じり、家族みんなの生活が家全体ににじみだしていたような気がします。しかし現代では、家族が個室の扉に鍵を閉め、本来の家族ではなく、家族をするための家というようになり、住宅の意味合いはかなり変化してきているように思います。



近代化によってもたらされ、現代の郊外では必要不可欠になった自家用車の居場所と昔の日本の家屋のような大きな屋根によって、現代のバラバラに切り離された個室を、緩やかにつなぐ住宅を未来に作るべきもの、残すものとして提案したいと思います。

建物の構成としては、一階に大きな庭のような車庫を設け、その間に個室をばら撒きました。そのことにより、車庫という空間が少し豊かになり、毎日乗る車を停めるお父さんが、今日はどの位置に停めようかなという楽しみができます。お父さんが車で出かけているときは、子どもたちとお母さんが少し大きな庭のような車庫の上の屋根裏のような空間に位置を変えます。一階のプランを見るとバラバラに切り離された個室があるだけですが、屋根裏の脱機能空間が家族の居場所として再構成されるのです。大きな屋根の下で、全てつながっているのです。昔、日本の家族が生活を屋根裏の空間によって共有していたように。

cooperator prize

協賛者賞 本郷 達也

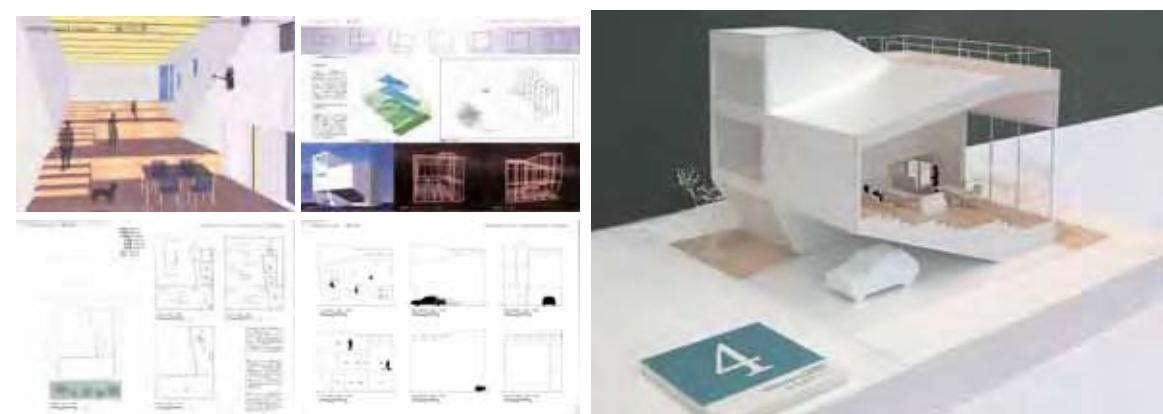
京都工芸繊維大学 大学院

「積分の家」



Concept

この住宅は、フレームを積層させることにより形成される。それぞれのフレームは、固有の関数(すなわちその土地のコンテキストや、クライアントのライフスタイルなどの条件)により決定される。任意の軸に沿って変化しながら連続するフレームに対して、フレームに直交する方向に内部空間が形成される。すなわち、内部空間はフレームを積分した解として現れることになる。これは木造住宅の設計における新たな方法論の提案である。



この住宅は7つのフレームからなり、3枚の構造壁が全体を一体化することで構造が成立する。道路側のフレームは地盤から浮き上がり、構造壁によって支えられるキャンティレバーとなる。地盤から切り離されたファサードは、壙を建てるといった街とのつながりを切断する住宅と街の関わり方に対して、新たな提案となる。

2007 住宅設計コンペ residential design competition theme「未来」優秀賞

excellent prize

Japan Architectural Consortium of Students



中村 裕太

慶應義塾大学 大学院 理工学研究科

「土間の家」

Concept

現代的 "DOMA" 空間の拡張(ゆるやかなコミュニケーションの誘発)おしつけがましいコミュニケーションの誘発を期待した設計手法は今までいくつかある、どこか居心地の悪さは解消できていない。私は、この住宅の設計をする上で、重要であることはコミュニケーションを誘発させるための器のようだ、どこか柔らかな接し方、あるいは、自己のプライバシーというものをどこまで解体できるかだと考えます。1Fの中心は "DOMA" 空間に沿って形成されています。その周囲に柔らかく外部を引き込み、同時にユニット化された各家族のプライベートを2Fから引きおろし、各部屋を2層分のメッシュネット化することで、1Fを "部屋" におけるpublic、2Fを "部屋" におけるprivateというように、2種類のファンクションに解体することで、"DOMA" と1F "部屋" 群は、ゆるやかに、public化され、周辺景観と一緒にとなり、家族単位はまた、家族全体と周辺住民とのコミュニケーションの場を優しく包含していく。



尾田 昌之

滋賀県立大学 大学院 環境科学研究科

「未来」

Concept

私はテーマである未来を、子どもの成長と捉えました。未来への希望や期待をわが子の成長に抱く両親もいれば、子のために一軒家を建てたいと思う親もいるでしょう。そういった意味で、未来一子一家という関係は切っても切り離せないものです。その重要な位置を占める「家」が、子どもが育っていく過程での思い出、または、巣立っていってもまた帰ってきたくなる心地よさを、今回の提案に組み込んでいきたいと考えました。



田中 和紗

東京電気大学 建築学科

「ランニングハウス」

Concept

エントランスは天井高が低く、家の前の花壇や木をみながら入ります。すると、どこまで玄関かわからない玄関につきます。そこは天井高が高く、ガラス張りでサンルームになります。寝室、風呂場の開口がずれて配置されています。両親が子どもを管理するためです。リビング、ダイニング、キッチン、子ども部屋は引き戸になっています。開け放つとワンルームにもなります。将来旅立つ子どもたちのことを考えました。長い玄関に浮いたような階段を上がっていくと、長いテーブルとプレイルームがあり、テーブルの向こう側は吹き抜けでリビング、ダイニング、キッチンが見えます。プレイルームは引き戸でテラスとつながっており、晴れの日など広々と使えます。

田島 誠・山田悟史・鈴木 紀之

日本大学 大学院 生産工学研究科 建築工学

「地域家族住宅」

Concept

私達の想い描く「未来」の住宅とは、地域家族を育む住宅です。戸建て住宅は、家族にとって最大限に快適な空間を作る事を主目的とします。それぞれの家族にとって心地よい住宅を設計する。この命題に間違ひありません。現在、様々なメディアによって一般の方の住宅に対する関心が高まる中、このような問題は専門的問題ではなく一般化してきています。社会問題を含む現代社会の流れにおいて私達は、「未来」の住宅として「地域家族生活」をテーマにします。私達は、企業として建売のシステム、ノウハウが蓄積された事は「未来」にとって大きなプラスであると考えます。地域との関わりという概念を積極的に加える事で、経済的な住宅のつまりを地域計画として供給する事を提案します。



真泉 洋介

千葉大学 大学院 工学研究科 建築・都市科学専攻

「家族の活動に潤いを与える屋根裏リビングを持つ住宅」

Concept

家族の活動にゆとりを持てる大きな空間がある住宅。この住宅の屋根裏は約80m²の広さを持つ大きなリビングルームです。リビングルーム、と言う家族がくつろぐ空間として考えられますが、この住宅では「生活に潤いを与える空間」として定義します。絵画が趣味の人は、いくらでも大きなキャンバスに自由に絵を描き、時には地域の人々を呼んで、小さな個展を開くことも可能です。趣味が映画の人は、7mの屋根から大きなスクリーンを下ろして映像を映し、映画館のような臨場感を味わうことができます。たまには、地域の人々や友達を呼んで、お気に入りの映画の上映会、というのも可能です。この空間を使う人のライフスタイルに応じて様々な使われ方をすると同時に、その趣味を家族以外の友人、地域の方々にも発信する場所になります。



渡邊 佳英・大塚 隆光・中野 正隆

日本大学 大学院 建築学専攻

『ソトに、一番近いイエ』

Concept

イエという箱の中で、ソトの景色や空気と暮らすことができたら、とても気持ちがいいと思います。広いイエで暮らすことも悪くはないですが、イエに近く、細く長いイエに暮らすことも悪くないと思いました。細くすることで、ソトと一番近い距離をつくり、長くすることによって、ソトと一番近い空間を連続させます。細くて長いパブリックの空間を軸にし、プライベートな空間を交差させ、プライベートとパブリックの関係を曖昧にします。家族の変化によって、プライベートな空間がパブリックな空間を侵食し、新しい空間をつくります。どこにいても、同じソトの景色を眺め、同じソトの空気を吸い、同じソトを通して気配を感じることは、暮らしをなにか豊かにしてくれると思います。



山根 俊輔

広島大学 大学院 工学研究科

「トンネル・ハウス」

Concept

住宅の中にジグザグのトンネルができました。このトンネル空間は、機能のないパブリックな場とプライベートな場となっています。住宅の未来を考えるとき、どの空間にどの機能が当てはまつてもよい、また可動式な壁など、用途変更可能なフレキシブルな空間を作ることがよいとされています。これには賃貸だけれども、機能・用途の変更ではなく、もう少し違ったアリカたの未来住宅があつてもよいのではないかと思います。そこで機能の持たない場、庭のような空間を多く含んだ住宅ができるのかと考えました。そうすることで、様々なシチュエーションに対応できるだけではなく、機能だけに囚われない、もっと豊かな未来を住む人が想像できると考えました。



脇坂 圭一

東北大学 大学院 都市・建築学専攻

「ニイガタ・スノー・クリスタル」

Concept

未来的な住宅はそこに住む人にとってのものだけではなく、地域のアイデンティティを表す存在でありたい。そういう願いから、この「ニイガタ・スノー・クリスタル」はできています。新潟に住む人々にとって、時に生活に制約を与える負の対象でありながら、しんしんと降り積もる夜の静寂をつくりだし、また訪れる春の喜びを与えてくれる「雪」が「ニイガタ・スノー・クリスタル」のモデルになっています。雪の結晶(クリスタル)は、どれもが微妙に異なる大きさを持ちながら、全体として集まつた時には透き通った統一感のある姿を見せてくれます。これからは住宅の個性と住宅地としての統一感が同居した活き活きとした生活の場が求められているのではないかでしょうか。さらめ雪原が春になって溶け出した時、きっともう一つのクリスタルが現れるはずです。



中古 敦法

広島大学 大学院 工学研究科

『イドコロの家』

Concept

『イドコロの家』は今を楽しみながら暮らし、未来を創造する家です。様々な社会問題を抱える今、大量生産によってつくられた画一的な住宅から抜け出してこの家を訪れましょう。ここでは家中にそれぞれが居場所を見つけ又は創り、この家で生活することが何よりも楽しい家を提案します。

2007 住宅設計コンペ residential design competition

winning prize theme「未来」

入賞

Japan Architectural Consortium of Students



織田 智広
神奈川大学 建築学科
「アスノイエ」

Concept

住み手の環境はどんどん変化していく中で、柔軟に対応できる住居が必要なのではないだろうか。異なる生活を共存せざるには、さまざまなアクティビティーが離散的に行うことのできる「距離」が必要である。その結果、一階にはプライバシーが高い個室を配置し、二階には流れるように繋がるリビング、キッチン等を配置した。個室と個室の間に存在する庭は「距離」を意味にすると同時に、四季の変化をゆっくりと感じさせる。「家族」が変化していくのに対して、柔軟に対応していくのではないだろうか。



田上 拓
京都工芸繊維大学 大学院 建築設計学専攻
「あたたかい土間のある家」

Concept

この家に入るとまず、玄関で靴をぬいで無垢のフローリングの広がるリビングに入る。このリビングは天井高が2,100mmと、ふつうの住宅よりもや低めになっている。天井の抑えられた空間は少しだけ薄暗く、大きな開口や奥の吹き抜けから入ってくる光が入り込んでくる。そんなやさしい光の入るリビングでは昼間からお気に入りのソファでほんやり外を眺めたり、夜遅くまで



中村 新菜
工学院大学 建築学科
「積み重ね住宅」

Concept

雪が降った後、そこは現在あるいは未来しか見えなくなる。雪は、過去のものを埋め尽くす。未来とは過去からの積み重ねである。雪も、過去のモノ(地表)がなければ降り積もることはできない。私たちが将来を考えるとき、その基盤には過去が存在している。この住宅は、上部に向かって過去から未来を重ねていく方法で創られている。主寝室を最下部に、子ども室を最上階に、それぞれの用途の部屋を層状に重ねた。その層状に重なった全体に穴をあけ、そこを過去から将来・未来へつながる空間とし、風・光・未来へつながる空間とし、風・光・動線の溢れる空間とした。



橋本 剛
熊本大学 大学院 自然科学研究科 建築学専攻
「繋がる縁側」

Concept

本計画の住宅は、「ヒトと自然」「ヒトヒト」「今と未来」とを繋ぐものです。今日の都市部における住宅の多くは自己完結的であり、狭い敷地に建てられては窒息してしまったような息苦しさを感じます。そこには豊かな「自然」などではなく、人工的なモノで埋め尽くされています。そうですが、そこには自然と接する場「庭」がないのです。居住スペースに敷地を割いてしまうが故に、外部の環境にまで配慮して計画する余裕がないのです。その結果、人は外に対して関心を払わなくなり、自然から遠ざかり、道行く隣人にも気が付かず、寂しい個人の世界に入ってしまうのです。本計画は、そんな現代において「閉ざされた外界との繋がりを回復するための住宅」の提案です。



湯浅 孝史
国士館大学 大学院 工学研究科 建設工学専攻
「庭アーチ」

Concept

家に帰ると、まず庭がある。
その奥には庭。その奥にもまた。いくつかの庭を通り抜け自分の庭へ戻る。
小さな樹の生えている庭。お父さんが世話をしている野菜のある庭。みんなが集まる庭。
個人の部屋、ごはんの部屋、お部屋、いろんな部屋があるけれど、それぞれの部屋が庭でつながる。
庭を通して、それぞれの部屋は広がりを得、つながったり、離れたりする。
庭をくぐり抜け、多様化する家。



山崎 智志
慶應義塾大学 大学院 政策・メディア研究科
「みらいの住宅」

Concept

僕たちはいま、あらゆる情報やモノにこままで暮らしている。今までえその量に圧倒されてあつかいに困っているのに、このままいたら未来はもっとすごいことになっているだろう。そう考えると、未来の住宅っていうのはちょっと足りないくらいがちょうどいいと思う。その不足を補うことを楽しめたら素敵だと思う。内だけで完結するのではなく、外を取り込む、あるいは、はみだす。たとえば、庭へ、森へ、路地へ、まちへ。そこには思いがけない出会いがあり、感動があり、いろいろな関係が生まれる。居場所としてのひろがり、それはひとをもっと自由にしてくれる。そんな住宅はとびきり贅沢な時間と場所をあえてくれる。



百田 有希・大西 麻貴
京都大学 大学院 工学研究科 建築学専攻
「ミルフィーユ・ハウス」

Concept

日曜日、サンルームでお父さんが日向ぼっこをしながら植木鉢に水をやったり、昼間土間で近所のお母さん同士おしゃべりに夢中になったり、子どもたち専用のリビングがあったり。家族全員で集まって過ごす場所の他に、たとえ狭くても、家族それぞれのための特別な場所がある、そんな家にしたいと思いました。大きな空間に壁をたてて仕切っていくと、広さや雰囲気の異なるいろいろな空間が生まれます。そして生まれた異なる空間を大きな窓でつないでいくことで、空間としてはゆったりつながっているながらも、さまざまな体験のつまつた家がつくれるのではないかと考えました。



河野 直・坂本 尚朗
京都大学 大学院 建築学
「変化し続ける未来とそれを受け入れる住宅」

Concept

よく友達を連れてきて家中を駆け回る長男、本が好きな妹、ピアノの先生をする母、仕事を自宅に持ち込む父。異なる4人の生活が折り重なって、ひとつの家をなす。4人の生活は不思議な壁で文節されながらも、時に見えたり、見えなかったり、聞こえたり、聞こえなかったり、風が通ったり不思議な壁の向こうにはもう一つの生活があるのだけれど、時に繋がったり離れたりする。

不思議な壁が4人にちょうどよい距離感を与える。仕事盛りの両親、育ち盛りの子どもたち住宅は4人とともに成長を継続し、その都度、4人にとってちょうどよい距離感を与える。



志村 尚美
宇都宮大学 大学院 建築学
「温室と暮らす家」

Concept

未来の変化に対応する家
家族の居住形態がずっと同じままであることはほとんどない。未来に進むにつれて家族を取り巻く環境や家族の距離は変化していく。近隣の環境も日々少しづつ変化していく。少しの時間による変化を緩やかに受け止めて成長していく家を提案する。



米本 雅喬
千葉大学 大学院 工学研究科 建築・都市科学専攻
「ウチとソトの解体」

Concept

生活スタイルが多様化している現在、住宅はもはや籠るためだけの場所ではありません。求められているのは、多様さを許容することのできる、いろいろな場面です。それは「ソトウチ」という単純な関係では生まれ得ない、また、伝統的な日本家屋にみられるような「ソトウチ」の段階的な連続でもない、もっと曖昧な関係なのです。



関口 貴人
東京理科大学 大学院 理工学研究科 建築学専攻
「森の中にある暮らし」

Concept

多くの住宅は壁や扉に囲まれ、外部と分断された空間になっています。さらに部屋が区切られることで家族とのコミュニケーションも希薄になっています。扉で囲まれた家は一日中窓も閉まつます。未来をテーマに、私は外を内に引き込むような家を考えます。そして、日常の暮らしの中に変化が起こることが個人の生活も地域との関係も豊かにするものと考えます。



高木 雄介・岡本 寛
芝浦工業大学 大学院 建設工学
「Q-house」

Concept

「色」という住宅。
家族によって多種多様なライフスタイルがある中で、人間が身体的に共有している部分をどのように設計し、住宅に「色」づけていかが今回のコンセプトとなった。
人間の身体性と外部環境との関係をどのように結びつけるかをテーマにし、今後の住宅のあり方について模索しようと考えた。



越野 達也・富田 哲人
首都大学東京 大学院 都市環境科学専攻
「オオキナ木のユカ」

Concept

大きな木のユカがじゅうたんのように敷かれ、その上に小さなユカが並べられています。どこでも寝転がれるような大きな床は、敷地周辺へと延長していくような広がりを作り出します。小さなユカにはそれぞれ機能とテクスチャを与えます。住民がその上で活動することで家具などが配され、敷地内に家族の豊かな生活の風景をつくれるのではないかと考えました。



秋山慎之介
日本大学 大学院 建築工学専攻
「植物とともに自由に成長していく家」

Concept

庭の中にいくつも玄関があるイメージ。その先に空間が続いていることを予感させるような壁の配置にすることで、自然とその先の空間に導かれ、前とは違った植物に囲まれた空間に出会う。1階は庭と家のなかが一緒に空間になっていて、その中で別々のスケールをもった場所が同時に存在している。2階はそれぞれの居室があり、生活スペースとして使われる。2階は1階ほど外には開かず、内側の壁の高さを少し押さえることで天井は一続きになり、圧迫感もなくなり実際よりも空間を広く感じることができるよう配慮した。



新井 恒太
新潟大学 大学院 自然科学研究科
「壁でつながる家」

Concept

1.個室をもうるのでなく行為の場をつくり、それらが開口や吹き抜けによってつながりをもち1つながりの家となる。お互いの気配を感じつつ生活できる空間の提案である。2.縦、横、斜めに視線を通しソト(庭)や人の見え方に変化を与える。気分や環境によって家族間や外部との距離感を選択できる空間の提案である。3.壁や開口の配置によってそれぞれの行為や外部との関係に様々な距離感と連続性を与える。開口の大きさや位置は隣の空間との関係性を示し、壁面は距離感を与える。壁と開口の関係によって個々の空間はつながりを与えられ、「1つながり」や「距離感」を満たしていく。



井村 武蔵
武藏工業大学 建築学科
「いえの中にあるちいさないえたちとの生活」

Concept

家の中にあるちいさいえはそこに住む人が選んで決めています。すでに立ち並ぶ建り住居を選ぶのではなく、自分の求める機能を選んでゆく。つまり、機能をもった小さな家のプロトタイプ(コンパクトな建り住居)に収めることで、ニュータウンに建てる新たな建り住居のあり方になるのではないかと考えました。また、この小さないえは生活環境の変化にも対応します。個々のいえが独立しているため、ひとつの家をリノベーションすることで多様に生活環境をかえると考えています。



當山 晋也
前橋工科大学 大学院 建築学専攻
「自己完結的でない住宅」

Concept

住宅を構成する空間に「何もない空間」を持ち込む。「何もない空間」とは「空(sora/kara/ku)庭」である。カタログ的な建住住宅によって無秩序に生産してきた隣地境界との間の隙間。これを再解釈、再構築、大きな「庭」として捉える。そうしてできた不十分な住宅は周辺に依存するようにはじめて成立する。しかもそれは依存する対象によって様々にその表情を変え、今までの住宅地の画一的な風景とは異なる表情を見せる。これは住宅地のコンテクストの再生産である。個性のなくなっていた住宅地にこの住宅が建てられることで、それがきっかけとなり、近隣住民をも巻き込んでいく。



小嶋 寿和
前橋工科大学 建築学科
「変化と開放」

Concept

住宅地の中のほとんどが木造であるが、それを認識できるのは少ない。木造(在来工法)の特徴といえば、柱・梁・筋交い・間柱などである。それを今回構造としてだけではなく、仕上げとして利用しようと思う。この建築は原っぱに一軒だけで建っていたとしてもあまり意味はない。住宅地にあることで新しい住まい方を見つけることが出来る。隣の家の壁がそのまま壁になり、木が視線をさえぎってくれる、など。少しの操作で風景を変え、住まい方も変わり、周囲に影響していく。これが自分が提案する住宅であり、未来を見据えた住宅である。



垣内 大輝
前橋工科大学 建築学科
『与えられた住宅、間取りではなく自分で考え使う住宅、間取り』

Concept

家をもっと楽しく、柔らかく多様に使えたほうがいい。そのため住む側に協力していただかなくてはならない。例えば、一見狭くて使いづらそうな場があったとき、駄目だと思うのではなくこの狭さだから出来る空間が必ずあると思っていただきたいのだ。それは設計者側のワガママだと思われるかもしれないがポジティブに考えていただくことによって、今まで体験したことのない空間が現れるかもしれないからだ。それが住宅の面白さだと思うからだ。

2007 residential design competition 住宅設計コンペ theme「未来」

未来の問題を多彩に解いた作品が集合した。

講評



吉田 研介
株式会社吉田設計室

「未来」とは困ったテーマだなと実は内心不安だった。このコンペに関わった時には既に決まっていた。施工の現実に苦労の無い学生だから、宇宙基地や地下壕のような空想建築を描いて、主催者が「建てられない」と困惑するようなことにならなければ良いがと気をもんだが、学生諸君は賢明だった。近代以降続いてきた核家族のための住居が、今現実といかにズレているかを考察して、その問題をどう解いていくか、「未来」つまり先を見通そうとしていた。或いは今日の不動産屋の商業ベースで建ち並ぶ醜い団地に批判の矢を向けようとするものもあった。「未来」に抱える問題を多彩に解いたと言えるのではないか。



諸角 敬
諸角敬建築・デザイン研究室 studio A

今回のコンペの重要なかつ貴重である点は、実際に建てることを前提とした学生向けのコンペであったことである。単なる案にとどまらず、実際に建てるという前提となれば自ずから設計に対する姿勢も変わり、学生も普段の課題とはまた違った気持ちで参加したのではないかと思う。コンペのテーマは「未来」という漠然としたものであったが、当然ただ単に綺麗で住み良さそうな案は高得点を得られなかった。また2作品を除き建築家審査員の重複票がなかったのは住宅の目標とするものの多様化を象徴したものであり、応募された作品の質が高くその中から数点を選び出さなくてはならない困難な作業であったといえよう。



高橋 真
株式会社高橋真建築設計事務所

最終審査の応募作品はどれも内容の高いものばかりでした。審査員の票がかなりのばらつきを見せたのもレベルの拮抗を示しています。敷地条件の解釈に自由度の多いこと、実施設計が建設会社に移る、という2点を考慮して僕は「型」の明確な建物を残したいと考えました。応募作品に一般解やパターンの提案が散見されたのも敷地を特定出来ない少し残念な結果でした。実現を前提としたコンペではもっと条件を具体的にしたほうが良かったと思いました。



岸本 和彦
有限会社acaa建築研究所

学生対象の住宅コンペとしてはユニークな条件が重なった。実施が前提ということ、具体的な敷地が与えられていないこと。そのふたつの条件は本来、相反する作品性を導き出すことが予測される。結論としては、保守的になりすぎず、抽象的過ぎない、具体的で魅力的な提案が入賞作に選定されたと思う。



上山 寛
一級建築士事務所 上山寛アトリエ

今回のコンペがアイディアコンペに止まらず、実際に建設され、建売り住宅として販売されると言う、学生にとっては夢のような話ではないだろうか。最終選考に残った作品はどれも見応えがあったが、具体的な敷地が与えられたなかでの提案でありながらも、隣地状況や周辺環境についての考察が不足しているもの多々あった。どんなに優れても、この点から上位に進めない作品もあったのは残念である。提案のなかで居住空間のなかに緑を埋め込んだ提案も多く見られたが、これらが全て優秀作に残らなかったことは、その完成度と近隣に緑が広がるなかで、果たして必要とされているかと言うことであろうか。

Time schedule

応募告知	平成19年(2007年)3月24日(土)
応募締切	平成19年(2007年)5月7日(月)
1次審査	平成19年(2007年)6月6日(土)・18日(日)
2次応募締切	平成19年(2007年)8月24日(金) 必着
2次審査	平成19年(2007年)8月25日(土) 一般公開審査

prize

下記賞品を受賞された方に差し上げます。

- 最優秀賞(1点) 最優秀賞者設計の住宅建設
※実施設計・施工管理及び、諸官庁の手続きは当社設計部が行います。
賞金100万円 + ヨーロッパ研修旅行
- 優秀賞(10点) 賞金 5万円
- 協賛者賞(1点) 賞金 10万円
- 入選 商品券 1万円

examiner

審査委員：株式会社吉田設計室 吉田 研介、諸角敬建築・デザイン研究室 studio A 諸角 敬、
株式会社高橋真建築設計事務所 高橋 真、有限会社acaa建築研究所 岸本 和彦、一級建築士事務所 上山寛アトリエ 上山 寛
(一般審査員(2次審査のみ)：一般審査員とは2次審査会場に来場する社会人を示す

講評風景



表彰式の会場には、一次通過者が集合。審査発表後には、審査員の建築家より、個別に作品の講評を得られる時間もあり、学生の方たちは、先生方の話を真剣に聞き、自分の課題点、評価点を改めて実感させられていきました。